

# じゅりあの・吉助

芥川龍之介

青空文庫



じゆりあの・吉助は、肥前国彼杵郡浦上村の産であつた。早く父母に別れたので、幼少の時から、土地の乙名三郎治と云うものの下男になつた。が、性来愚鈍な彼は、始終朋輩の弄り物にされて、牛馬同様な賤役に服さなければならなかつた。

その吉助が十八九の時、三郎治の一人娘の兼と云う女に懸想をした。兼は勿論この下男の恋慕の心などは顧みなかつた。のみならず人の悪い朋輩は、早くもそれに気がつくといよいよ彼を嘲弄した。吉助は愚物ながら、悶々の情に堪えなかつたものと見えて、ある夜私に住み慣れた三郎治の家を出奔した。

それから三年の間、吉助の消息は杳として誰も知るものがなかつた。が、その後彼は乞食のような姿になつて、再び浦上村へ歸つて来た。そうして元の通り三郎治に召使われる事になつた。爾来彼は朋輩の輕蔑も意としないで、ただまめめしく仕えていた。殊に娘の兼に対しては、飼犬よりもさらに忠実だつた。娘はこの時すでに婿を迎えて、誰も羨むような夫婦仲であつた。

こうして一二年の歳月は、何事もなく過ぎて行つた。が、その間に朋輩あいだは吉助の挙動に何となく不審ふしんな所のあるのを嗅かぎつけた。そこで彼等は好奇心に駆られて、注意深く彼を監視し始めた。すると果して吉助は、朝夕あさゆう一度ずつ、額に十字を劃して、祈禱を捧げる事を発見した。彼等はすぐにその旨を三郎治に訴えた。三郎治も後難を恐れたと見えて、即座に彼を浦上村の代官所へ引渡した。

彼は捕手とりての役人に囲まれて、長崎の牢屋ろうやへ送られた時も、さらに悪びれる気色けしきを示さなかつた。いや、伝説によれば、愚物の吉助の顔が、その時はまるで天上の光に遍へん照しょうされたかと思うほど、不思議な威厳に満ちていたと云う事であつた。

## 二

奉行ぶぎようの前に引き出された吉助きちすけは、素直に切支丹宗門きりしたんしゅうもんを奉ずるものだと白状した。それから彼と奉行との間には、こう云う問答が交換された。

奉行「その方どもの宗門しゅうもん神しんは何と申すぞ。」

吉助「べれんの国の御若君おんわかぎみ、えす・きりすと様、並に隣国の御息女ごそくじよ、さんた・まり

や様でござる。」

奉行「そのものどもはいかなる姿を致して居るぞ。」

吉助「われら夢に見奉るえす・きりすと様は、紫の大振袖をおおふりそでを召させ給うた、美しい若衆の御姿でござる。まったさんた・まりや姫は、金糸銀糸の繡をされた、襦袢の御姿と拝み申す。」

奉行「そのものどもが宗門神となつたは、いかなる謂れがあるぞ。」

吉助「えす・きりすと様、さんた・まりや姫に恋をなされ、焦れ死に果てさせ給うたによつて、われと同じ苦しみに悩むものを、救うてとらしようと思召し、宗門神となられたげでござる。」

奉行「その方はいずこの何ものより、さような教を伝授されたぞ。」

吉助「われら三年の間、諸処を經めぐつた事がござる。その折さる海辺にて、見知らぬ紅毛人より伝授を受け申した。」

奉行「伝授するには、いかなる儀式を行うたぞ。」

吉助「御水を頂戴致いてから、じゆりあのと申す名を賜つてござる。」

奉行「してその紅毛人は、その後いずこへ赴いたぞ。」

吉助「されば稀有な事でござる。折から荒れ狂うた浪を踏んで、いず方へか姿を隠し申した。」

奉行「この期に及んで、空事を申したら、その分にはさし置くまいぞ。」

吉助「何で偽などを申上ぎようず。皆紛れない真実でござる。」

奉行は吉助の申し条を不思議に思った。それは今まで調べられた、どの切支丹門徒の申し条とも、全く変つたものであつた。が、奉行が何度吟味を重ねても、頑として吉助は、彼の述べた所を翻さなかつた。

## 三

じゅりあの・吉助は、遂に天下の大法通り、磔刑に処せられる事になつた。

その日彼は町中を引き廻された上、さんと・もんだにの下の刑場で、無残にも磔に懸けられた。

磔柱は周囲の竹矢来の上に、一際高く十字を描いていた。彼は天を仰ぎながら、何度も高々と祈禱を唱えて、恐れげもなく非人の槍を受けた。その祈禱の声と共に、

彼の頭上の天には、一団の油雲あぶらぐもが湧き出でて、ほどなく凄じい大雷雨が、沛然はいぜんとして刑場へ降り注いだ。再び天が晴れた時、磔柱の上のじゆりあの・吉助は、すでに息が絶えていた。が、竹矢来たけやらいの外にいた人々は、今でも彼の祈禱の声こゑが、空中に漂っているよ  
うな心もちがした。

それは「べれんの国の若君様、今はいずこにましますか、御褒め讃え給え」と云う、簡か古素朴んこそぼくな祈禱だつた。

彼の死骸を磔柱から下した時、非人は皆それが美妙な香かおりを放っているのに驚いた。見ると、吉助の口の中からは、一本の白い百合ゆりの花が、不思議にも水々しく咲き出していた。

これが長崎ながさき著聞集ちよもんしゅう、公教遺事こうきよいういじ、瓊浦把燭談けいほはしよくだん等に散見する、じゆりあの・吉助の一生である。そうしてまた日本の殉教者中、最も私わたくしの愛している、神聖な愚人の一生である。

(大正八年八月)





# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集<sup>3</sup>」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年12月1日第1刷発行

1996（平成8）年4月1日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：earthian

1998年12月28日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# じゅりあの・吉助

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>